第 2.1 節　川崎市政 100 年　国史跡橘樹官衙遺跡群(その１)　　2024 年 5 月　第 76 号

2.1.1 橘樹官衙遺跡群飛鳥時代の倉庫復元

全国初となる飛鳥時代の倉庫を復元した「橘樹歴史公園」(川崎市高津区千年)が 202 年 5 月 18 日（土）にオープンします。同園は 140 万都市「川崎」の原点となった古代の多摩川下流域の歴史像で、1300 年以上前の地域の歴史が感じられるそうです。同園は 2015 年に指定された市内初の国史跡・橘樹官衙遺跡群（くにしせき たちばなかんが いせきぐん）に位置し、史跡は千年伊勢山台遺跡(橘樹郡家跡)と隣接する古代寺院跡の影向寺遺跡(野川本町)から構成されています。 7 世紀から 10 世紀の地方行政組織の成立背景や推移をたどれます。

1966 年に行われた遺跡の発掘調査で、市は東西に並ぶ 7 棟の掘立柱建物跡を発見しました。稲などを保管するための正倉とみられ、その後の調査で 7 世紀後半から 8 世紀に造営、平安時代の 9 世紀中ごろに姿を消したことが明らかになりました。

本遺跡は、伊勢山台と呼ばれる東西にのびる多摩丘陵の標高 40～43m の平坦な丘陵上に位置し、1998 年（平成 10 年）度から 2004 年（16 年）度に行われた橘樹郡衙推定地確認調査の過程で発見され、その後もガス管埋設工事や開発事業に伴う調査や遺跡の詳細な内容把握のための確認調査等で調査研究が進められています。奈良・平安時代で、指定面積は橘樹郡家跡 4972.77 ㎡、高津区千年字伊勢山台 423 番 1 ほか 33 筆の規模です。

橘樹官衙遺跡群は、地方官衙の成立から廃絶に至るまでの経過をたどることのできる貴重な遺跡で、その成立の背景や構造の変化の過程が分かり、古代の実態とその推移を知るうえで重要であるとして、2015 年（平成 27 年）3 月 10 日に川崎市初の国史跡に指定されました。

遺跡群が地下に眠る「たちばな古代の丘緑地

2.1.2　千年伊勢山台遺跡とは

千年伊勢山台遺跡は高津区千年の丘陵上に営まれた縄文時代から中世にかけての複合遺跡です。このうち、古代橘樹郡の役所にかかわる遺跡を「千年伊勢山台遺跡［橘樹郡家跡］」といいます。これまでに発見された遺構は、掘立柱建物、塀、それに掘立柱建物の一部と考えられる柱穴群等です。これらの遺構は建物方位が大きく真北から西に 30 度ほど傾くグループ（1 期・2 期）と、ほぼ真北になるグループ（3 期・4 期）とがあり、それぞれのグループでも建物同士の重なりや規模などから新旧がさらにわかれ、現在では、最も古い 1 期（7 世紀後葉）から最終段階の 4 期（9 世紀後葉）までの、4 時期の変遷が想定されています。

7 世紀後葉には、3 間×3 間の平面形式で大規模な総柱式の掘立柱建物（以下、「総柱建物」という）が整然と配置され、橘樹評段階の地方拠点とした地方支配の成立過程では、この時期がひとつの画期となっていたことを明瞭です。郡家（評家）成立の当初から、同規格の倉が立ち並ぶ姿は全国的にも稀なことです。

閑話休題　　郡家（ぐうけ）とは、古代の律令制度下でおかれた郡において、郡司（ぐんじ）以下の官人が政務をとった役所のことです（考古学の用語としては、郡家のことを郡衙と呼ぶこともある）。郡家には、郡庁（ぐんちょう）・正倉（しょうそう）・館（たち）・厨家（くりや）などが設けられました。

このうち、郡庁は郡の政務をとる庁舎、正倉は税として納められた穎稲（えいとう＝穂首刈りをした稲穂）などを納める倉庫群で、溝や塀で区画された場合は正倉院（しょうそういん）と呼びます。館は宿泊施設、厨家は郡家で行われる給食や饗宴のための厨房で、その他に手工業生産のための工房や祭祀場などがおかれました。

2.1.3　正倉院

8 世紀前葉には、ほぼ真北方位をとる正倉群が造営されはじめ、周囲を溝で囲んだ正倉院のなかに総柱建物の倉が数棟ずつ直列に並ぶ小群が複数形成され、まさに典型的な郡家正倉院の姿を示していま

す。こうした郡家正倉の成立は、701（大宝元）年の「大税貯置」の勅、708（和銅元）年の不動倉設置策、714（和銅 7）年の租倉の等級制定などを契機とした稲穀貯積の本格化、真北方位をとる官衙施設の普及・整備、あるいは『続日本紀』の 734（天平 6）年正月 18 日の勅による雑色官稲と正税との一体化などに対応したものであったと考えられます。

古代の技術を採用して復元された倉庫

橘樹郡家跡では、各小群の倉の増築順などもある程度復元可能で、早期には 7 世紀段階の正倉の設計あるいは建物そのものを受け継いだとみられる倉も造られていたことや、8 世紀後半にかけて増築が進み拡充していった様子が明らかになっています。しかし、9 世紀には、一部にみられる改築や新造も小型の建物ばかりで、大規模な倉は作られることなく、正倉院は急速に衰退し、9 世紀半ばには消滅します。

8 世紀後半以降も礎石建ちの倉を伴わないこと、他郡よりも早く郡家正倉院が衰退に向かう様相なども判明しており、正倉院の分散設置や郡家の移転の可能性なども考えられます。

この様なことから、7 世紀後葉から 10 世紀にかけての古代地方官衙の成立から廃絶迄の推移を知る上で、全国的にも貴重な遺跡と評価されています。橘樹郡家跡も、このような施設からなっていると考えられますが、現在のところ確実に判明している施設は、租税を納める倉庫が並んでいた正倉院のみです。橘樹郡家跡では、最も広い部分で東西約 210m、南北約 160m の東西南北を区画する溝の一部が確認されています。また、正倉院の西側には、さらに郡家に関連すると考えられる大型建物群が広がっていることが分かってきました。

（橘樹郡家跡現地調査）

（千年伊勢山台遺跡）

橘樹郡家跡の確認調査で発見された正倉院内部の建物跡は、建物の主軸方向がほぼ東西南北に沿っているグループと、建物の主軸方位がやや西側に振れているグループが存在しています。

この違いは建物が建てられた時期の違いと考えられています。これらのグループの中でも建物どうしの重なりや規模などから、さらに新旧が分かれ、現在では７世紀後葉から９世紀後葉まで４時期の変遷を想定できます。また、この総柱式建物群の西側には、類似した規模の側柱建物が並列に計画的に配置されています。その性格については確定が難しいですが、稲を収納する正倉と並んで、武器あるいは他の税物などの収納庫が建てられていた可能性もあり、８世紀以降の郡家とは違った、評段階の役所がもつ多様な機能を反映している可能性もあります。(川崎・たちばなの古代史　村田文夫氏より)

人生を豊かに（雑学のすすめ）　【アリス谷村新司の昴（すばる）の本意とは？】

アリスの谷村新司（1948 年－2023 年）さんへの新春インタビュー（2023 年）です。ソロの代表曲である「昴－すばる」に込めた思いは、

「みんな、いろんな夢を持って生きていくんだけど、年齢とともにそれを諦めざるを得ないときもある。そんなときは、その夢を僕に預けて下さい。それを背負って行けるとこまで行ってみます。それが、『我は行(ゆ)く』という歌詞の本意です」。

方向性を一つに決めることには耐えられないそうです、

「アーティストは『ファンをどれだけ感動的に裏切り続けられるか』が大事との事。感動が無ければ単なる裏切りになってしまうので、そうならない様に万全を期して準備をします。安定よりも不安定さに挑戦してみようと思うとエネルギーが湧いてきます。不安定であることってアーティストにとってはすごく重要で、安定したアーティストはあんまり魅力がない」

さらに、

「音楽でいちばん大事なのは、何を伝えるかです。アナログの最先端はハートです。この人は何を言おうとしているのだろう、何で涙が出てくるんだろうっていう感情の部分は、デジタルじゃ絶対に表現出来ないと思うんですよ。だから、デジタルとアナログを上手に融合させながら、一番大切な『心を伝える』っていうことだけは忘れてはならないと改めて思います」

【南京大虐殺とマギー神父】については第１０章に移行しました。

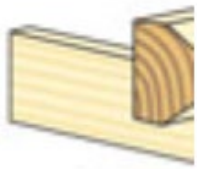
第 2.2 節　川崎市政 100 年　国史跡橘樹官衙遺跡群(その 2)　　2024 年 7 月　第 78 号

2.2.1　正倉建物の特徴とは？

１）校木（あぜき）

正倉建物の特徴のひとつは、根太組（ねだぐみ）の上に井桁（いげた）に組み重ねる校木（あぜき）です。校倉（あぜくら）造りの外壁として組み上げる木材のことです。

校倉造りは校木が外気に合せて自在に収縮・乾燥するので、宝物が保護されてきたと、私たちは学校で教わってきました。しかし、実際は校木と校木は隙間だらけで、外気は自由に出入りが出来ました。宝物が保護出来たのは、こうした校木の構造や、地面からの湿気を避ける高床構造、定期的な宝物の陰干しがあったからです。このことは坂本功著の「木造建築を見直す」岩波新書に書かれています。



（校木）

２）正倉建物の南北軸からのずれ

千年伊勢山台遺跡の正倉群の建物の方位が南北軸から振れる理由は、条里遺構や道路の方位との整合性が定説化しています。自然地形（台地の主軸位）に合せていた可能性も大いにありそうです。60°（千年伊勢山台の第Ⅰ期正倉）と、30°（影向寺第Ⅰ期掘立柱建物）を合わせると 90°の直角になる点がポイントになります。

３）古墳と偽装する盛土

『常陸国風土記』（香島郡）では、郡衙の政庁の南門は最も枢要な位置です。行方郡衙には、その位置に一本の大きな槻の木が有り、枝が垂れ下がって地面に触れ、跳ね上がって空に聳（そび）えます。以前は沼地だったので、長雨が続くと郡庁の庭には水がたまるとの記載が有ります。間違いなく橘にも槻と同系の神樹信仰が有り、郡衙政庁の選定には、神樹の生えている位置が最優先されていたのでしょう。

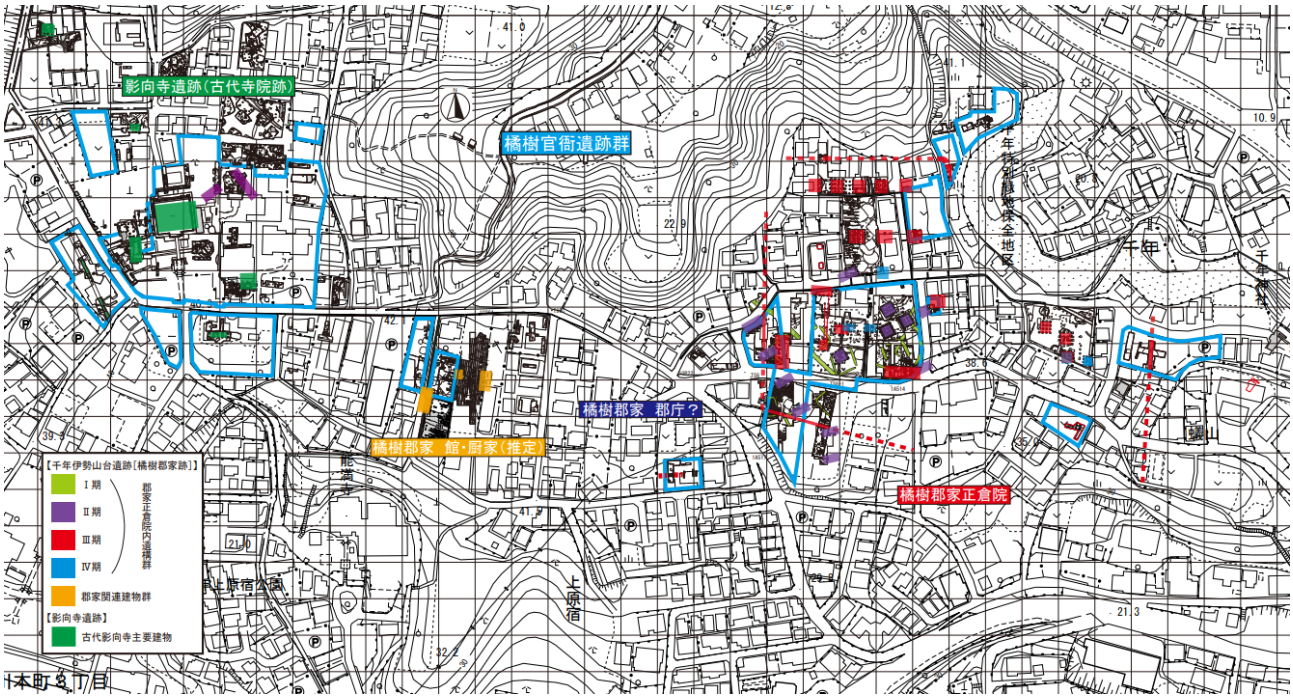
1929 年（昭和 4 年）の地図では、台地裾部の橘樹神社と蓮乗院の北北西方角をよく見ると、約 180～190m離れた位置に、まさしく小さく「盛土」を表す地図記号が有りました。現在の地図と比べると、驚くことに子母口富士見台公園、すなわち子母口富士見台古墳の位置とぴったり合致しています。

2.2.2 盛土の解明と神話

なぜ古墳と偽装する様な「盛土」をしたのでしょうか。林田文雄氏の仮説をみましょう。子母口富士見台の台地には郡庁（評庁）が設定され、その正面には神祇祭祀が込められた樹木－橘の大樹－とか、神祇に関わる建物（神社遺構）等が有り、領民の尊崇を受けていました。そうした神祇信仰の歴史は、律令制が解体され子母口郷の郷社になっても継承されました。1384 年（永徳 4 年）の地検目録に見える立花宮が、まさにそれでしょう。

古代から連綿と伝承してきた場所での神祇祭祀を絶やすわけにはいきません。時をおかないで、立花宮の位置から約 50m後方に、高さ 3～4mの古墳に擬した「盛土」を作り、橘樹神社（立花宮）の御神体にちなむ日本武尊と弟橘姫の神話に従ったもの思いませんか。

影向寺台・千年伊勢山台・子母口富士見台が古代橘樹郡の政治的・宗教的な舞台ならば、東海道は現在の千年の十字路から蟻山坂（ありやまさか）を上って千年伊勢山台と子母口富士見台の間を抜けて野川に出て、そこから横浜市側に推測される高田郷の中心部へ通じる道（近世の中原街道ルート）ではなかったと考えられませんか。



（橘樹官衙遺跡群関連施設推定位置図）
（川崎・たちばなの古代史　村田文夫氏より）
（画像は Yahoo Japan から引用）

人生を豊かに（雑学のすすめ）

【イラク派遣部隊の ABC＋DE とは？】

イラク派遣部隊の初代指揮官を務めた番匠（ばんしょう）幸一郎さんから、イラクから全員無事に帰ってこられた理由は、「ABC＋DE」と話していました。当たり前のことを馬鹿にしないで、ちゃんとやる。出来るだけ笑顔で、だと。

よく近道だとかコスパやタイパが大事と言われていますが、当たり前のことを積み重ねていく努力にこそ価値があるのでしょう。努力しても報われるとは限りません。むしろ報われないことのほうが多いかもしれません。でも、努力したら必ず成長します。成長したら選択肢が増えます。選択肢が増えたら今までと違う形で夢が実現するかもしれません。

第 2.3 節 川崎市政 100 年　国史跡橘樹官衙遺跡群(その 3)　　2024 年 10 月　第 81 号

2.3.1 遺跡群の考古学的価値

１）国宝秋草文壺と祭政一致の証明

「武蔵国・橘樹官衙遺跡群の古代史」（村田文夫）を参考にしましょう。その遺跡は、1996 年（平成８年）６月、突然我々の眼前に姿を現しました。それが武蔵国橘樹郡の正倉院遺構の一角であることは一目明瞭でした。古代橘樹郡の「郡寺（ぐんでら）」的な性格を濃厚に備えた宮前区の古刹・影向寺（ようごうじ）と合わせて 2017 年（平成 27 年）３月 10 日、国史跡に指定されました。

川崎市には、多くの国・建・市指定の文化財があります。なかでも国宝・秋草文壺（あきくさもんのつぼ）は、幸区南加瀬から 1942 年（昭和 17 年）に発掘され、未だに日本の陶磁器史上最高峰の逸品です。発見時の経緯から、その後は慶応大学の所蔵になり、現在は東京国立博物館に寄託されています。この様に考えると、武蔵国の橘樹官衙遺跡群の国史跡指定は、大地に根付いた考古の資料として初めての慶事と言えるでしょう。

現代では、憲法で政治と宗教が不介入の「政教分離」が原則ですが、古代では真逆の「祭政一致」を常としていました。そこで宗教的な施設の寺院（郡寺）と、行政上の施設である官衙（役所）で近接して設営され、地域を統治していました。考古学的には、寺院に当たる「郡寺」は発掘されても、行政の郡衙の位置は確定していませんでした。幸いに橘樹官衙遺跡群の発掘で、両社の関連性が見事に証明されました。

２）川崎の条里の痕跡

考古学者・田中琢（奈良在住）が東京に住んでいた時、道に迷ったそうです。一定の距離を歩く。当たりの直角のまがり角を曲がる。同じ方向に三度繰り返すと、もとの出発点に戻ることができるはずなんですが。これは町の中に文化遺産が活きている関西と、そうでない関東との差です。関西には、碁盤の目の様に区画された道が現代の都市計画に組込まれています。

川崎の街並にも、条里遺構（班田収授に基づく口分田の班給を行うため、土地を１町約 109m間隔の道を正方形に配置）が残されていることは 1936 年（昭和 11 年）発表の学術雑誌に記載されています。川崎市地名資料室所蔵の 1920 年（大正９年）製の高津村全図には、久本村に１辺 109m四

方の条里制の地割が詳細に描かれています。村田氏が現地を確認すると、主要な街区は１辺が 109m 前後だったそうです。

中原区小杉御殿町・小杉陣屋町周辺も条里遺構の痕跡を明瞭に伝えています。この事実は歴史地理学の足利健亮が指摘しています（「地図から読む歴史」）。東横線・横須賀線・南武線の武蔵小杉駅で下車し、多摩川寄りの改札から御殿町方面に向かうと、直線道が直角に整然と続いていることに気が付くでしょう。古代の国家プロジェクトが思い描いた租税徴収策が現代の街並に生きている文化遺産でしょう。

2.3.2 橘樹郡の規模

１）人口は 6000 人

『和名類聚抄』（源順（みなもとのしたごう）が編纂した古代の百科事典、10 世紀前半に成立）によると、奈良時代の橘樹郡内は高田郷・橘樹郷・御宅郷（みやけごう）・県守郷（あがたもりごう）の４郷にわかれ、平安時代に駅家郷（うまやごう）が加わりました。「郷」は現代の「○○区」に相当します。１郷の範囲は、地図上の線引きではなく、50 戸が１単位で編成していました。１戸が 24 名と復元する大所帯もありました（下総国葛飾郡大嶋郷の場合）。領民には納税の他、兵役や一定日数の労役を課すので、大所帯に括られていた様です。つまり、領民は戸籍による総背番号制のもとで、地べたに拘束されていたのです。１戸 24 名で橘樹郡の人口を試算すると、24 人 x 50 戸 x 4 郷（奈良時代は４郷）＝4,800 人前後。平安時代は５郷なので、6,000 人前後になります。

２）无射志国荏原評の銘瓦

无射志国荏原評銘文字瓦

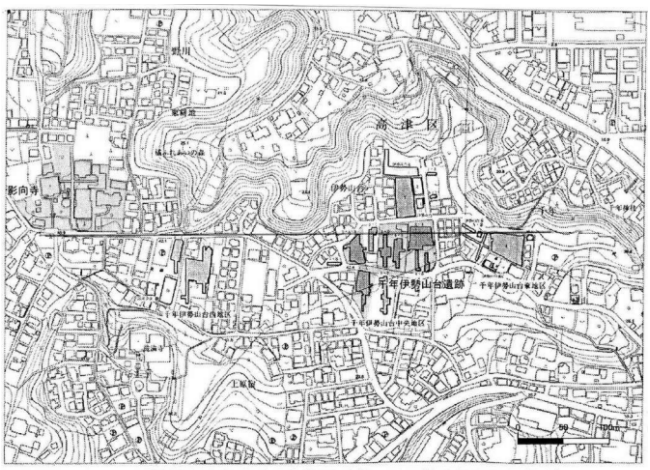
无射志国荏原評銘文字瓦

无射志国荏原評（むざしこくえばらこほり）の銘瓦は総 31cm、横 23.1cm の平瓦で所有者は川崎市です（市重要歴史記念物 平成 15 年４月 22 日（現在は中原区の市民ミュージアムに保管）。そこには７文字が工具の先端で刻字されていました。７文字に続く文字があったかは不明です。奈良、飛鳥京跡から「无射志国」（7 世紀後半）、京都・長岡京跡から「无射志国」（784 年～794 年）と書かれた木簡（文字が書かれた木札）が発掘され、「万葉集」でも武蔵野を万葉仮名で「牟射志野」と表記しています。このことから「无射志国」とは次のことから「ムザシコク」であることが分かりました。

瓦の製作年代は、後半の３文字「荏原評（えばらこほり）」が大きなポイントです。武蔵国橘樹郡は、大宝律令が施行された 701 年（大宝元年）以降の行政区名です。それ以前は「○○郡」ではなく「○○評」なので、文字瓦の製作年は、必然的に 701 年以前になります。「无射志国荏原評」の様に、

国と表を併記するのは、木簡などの研究から、684 年（天武 12 年）以降とされています。よって、文字瓦の製作年は 684～701 年と特定出来ます。

次に「荏原評」の地名の問題です。本文字瓦の出土した影向寺は、武蔵国橘樹郡（大宝令施行以前は「橘樹評」で、現在は宮前区野川 420）にあり、本文字瓦の評名「荏原評」とは評の名称が異なっています。影向寺は、通称影向寺台と呼ばれる台地上に立地していますが、影向寺の東方約 300m に位置する千年伊勢山台北遺跡（現、高津区千年）から橘樹郡家の正倉と推定される遺構が検出され、この周辺域に橘樹郡家が所在している可能性が推定されています。



橘樹官衙遺跡群の全体図（薄いアミ掛け部分が国史跡）

この事実は、本文字瓦が影向寺の所在する橘樹評（後の橘樹郡）ではなく、北東に隣接する荏原評からもたらされた瓦であったことを示しています。すでに影向寺境内からは、「都」と箆（へら）書きされた文字瓦が 2 点採集され、東京都国分寺市の武蔵国分寺の文字瓦との比較から、西に隣接している都筑郡から橘樹郡にもたらされた第 2 期の瓦と考えられます。このことから、7 世紀後半に、隣接する荏原評から本文字瓦がもたらされた事実が明確になりました。

荏原評から送られた本文字瓦が、橘樹評の影向寺で出土した理由として、次の二つの理由が推定されています。第一は、影向寺の創建にあたり、隣接する荏原評に税制（この場合は、おそらく 689 年（持統 3 年）に施行された飛鳥浄御原令に基づく税制）を含めた何らかの負担が要請されたこと。第二に、影向寺の建立に、隣接する荏原評の知識（善知識）的な要因で瓦が寄進されたことです。

本文字瓦の出土で明らかになったことは、7 世紀後半の橘樹評における寺院建立に際し、隣接する荏原評から平瓦が搬入されていた事実です。橘樹評という 1 行政区画ではなく、広く武蔵国南部の評から協力・支援を得て、影向寺が創建された様です。つまり影向寺は、橘樹評に居住していた有力氏族が自らの財力だけで建立したというような性格の寺院ではないと考えられます。

従って、影向寺の考察では行政的側面や仏教における知識的要素を考慮する必要が生じます。こうした重要な事実を示した本文字瓦は、古代南武蔵の歴史を知る上で極めて重要であり、考古学ばかりか、歴史学・宗教史・文化史・建築史上、価値の高い資料です。（川崎市教育委員会事務局の資料を参考）

最後に、村田氏の推測です。无射志国荏原評（むざしこくえばらこほり）の銘瓦が多摩川を挟む右岸の「橘樹評衙」（位置は子母口富士見台）の官屋内に飾られていた目的は、荏原・橘樹評衙の強い連帯を顕示するするためで、領民の目に晒しておくのが最も効果的でした。ヤマト政権側の政治的な介入もあったと推測しています。

人生を豊かに（雑学のすすめ）　　東日本壊滅はなぜ免れたのか

東日本壊滅はなぜ免れたのか? NHK メルトダウン取材班が取材期間 13 年、のべ 1500 人以上の関係者取材で、衝撃的な事故の真相。他の追随を許さない圧倒的な情報量と貴重な写真資料を収録した、

単行本『福島第一原発事故の「真実」』は、2021 年「科学ジャーナリスト大賞」を受賞しました。

米国では原子炉運転中に実動作試験が行われているのに対し、日本では原子炉を停止して行う定期点検の際に、弁の開閉を確認したり、ポンプを起動して吐出圧力や吐出流量を確認する試験方法がとられています。また、日本では停止中でも実動試験を行わないで、制御回路の確認だけで済ませている設備も有ります。なお、米国も運転中には行わないで、停止中に行う実動試験もあります。東京電力ではイソコン（註１）を使用して対応しなければならない大きな事故が起きるリスクは軽視され、実動試験が持つ訓練の意味合いも深く考えていなかったのです。その結果、事故に対応するための知識や訓練が不足する大きなリスクを背負いました。

福島第一原発の事故では、中央制御室だけでなく、事故対応の指揮を取った免震棟を含めて、誰一人として実際にイソコンが動いている所を見た人は居なかったのです。また、中央制御室もイソコンのタンクの冷却水が減って、配管が壊れることを恐れ、再起動させたイソコンを停止させました。
仮に、実動作動試験が定期的に行われ、所員がイソコンの挙動や性能を熟知していれば、津波に襲われ電源を喪失した後の早い段階でイソコンが動いていないことに気付くことが可能だったのではないでしょうか。そうすれば、メルトダウン（註２）を食とめることが可能な時間内にイソコンを再起動させたり、別の冷却手段を確保したりして、事故対応を変えることが出来たのではないでしょうか。

（註１）イソコン：福島第一原発１号機の非常用の冷却装置。 正式には「非常用復水器」、通称「イソコン」と呼ばれる。トラブルなどで原子炉の圧力が高まると自動で起動し、電源が無くても配管の弁さえ開いていれば、原子炉からの蒸気が冷却水に入ったタンクの中で冷やされて戻ってくる。

（註２）メルトダウン：炉心溶融。 原子炉で，冷却装置の停止で炉心の熱が異常に上昇し燃料溶融が起こり，燃料集合体などの溶融物が炉心の下部へ落ちていく状態。メルトダウンが起こると水蒸気爆発が起こり、放射性物質が直接外気に、それも大量に、制御不能状態で 放出される。

（福島第一原発事故の「真実」 検証編（講談社文庫 NHK メルトダウン取材班（著)より）
ご存じですか

耳寄り情報

休むのも仕事の内と心得るべきです。良い仕事をしようと思ったら是非、メリハリをつけて「静」と「動」を意識し、切の良いところで休暇を取得する等一息つきましょう。つまり「仕事をする」と「休む」をセットで考えて欲しいのです。上司は次から次へと仕事を与えないで下さい。

実は、筋肉等も筋トレを毎日継続するより、１～2 日おきにする方が効果的です。大胸筋なら 36 時間、上腕二頭筋なら 24 時間の休息時間が生理学的には必要です。休んでいる時に筋肉は回復しながら太くなっていくのです。つまり、これが成長なのです。野球のピッチャーも中３日なら次の登板迄３日は間を空けるということです。仕事を考えない時が有るからこそ、真新しいことに触れる、感じ取れる感性が磨かれます。オフの時に、美味しい物をおいしい、美しいものを美しいと感じる余裕を持つことが重要です。

もちろん、仕事に没頭することを否定するものではありません。がむしゃらに集中することが有っても良いのです。ただ、その後には、必ず成長のためにも、次の出番の為にも、心身を休めることが重要です。（ 参考：永井秀明氏 消防署長の朝会の言葉 50 選）